

特別講演 1

心臓外科医としての半世紀

和田 壽郎

世界心臓胸部外科学会会頭

1922年北海道札幌市に北大教授で国際法を米国で学んだ和田禎純氏の長男として生まれる。弟の和田淳氏も医学者で、てんかん等の脳外科手術で用いられる大脳の言語優位半球の判定法。ワダテストの開発で知られている。北海道大学予科。医学部を1944年主席卒業。1950年日本人医師第一号として渡米。オハイオ、ミネソタ、ボストン（ハーバード大）。4年間のアメリカ留学後帰国。札幌医大に迎えらる。1958年36歳の若さで同医大に新設された胸部外科の初代外科教授となった。アメリカ留学時代に培った合理主義。又患者への奉仕を基本として種々の新しい手術を行う。後にデントン クーリー医師が世界で初めての人の人工心臓に使用した。画期的な人工心臓弁「和田人工弁」を開発。弁置換手術において日本一の実績を誇る。現在その人工心臓はワシントン スミソニアン博物館に展示されている。その後も心臓外科において次々に新たな手法を開発。1968年には日本初。世界で30例目となる心臓移植手術を行う。1977年に東京女子医大に招聘され主任教授に就任。東京女子医大退職後は、新しい企画で世界心臓胸部外科学会創立等々。現在もこの学会は毎年一回世界中で開催されている。昨年。ギリシアで日本人としては初の“世界7人の心臓外科医の1人”に選ばれた。

1959年には第4回国際高気圧医学会を札幌で開催。その足跡をDVDで綴り。第43回日本高気圧環境・潜水医学会学術総会での特別講演とする。

特別講演 2

HBOTの今後の方向性について

眞野喜洋

日本高気圧環境・潜水医学会 代表理事

1966年に日本胸部外科学会内に高気圧酸素治療に関する研究会が発足し、それが発展的に日本高気圧環境医学会を経て今日の学会へ成長し、この度、郷一知会長の下に第43回学術総会を迎える事ができた。

治療としての高気圧療法は1830年代に欧州、特にパリを中心に圧気浴（Compressed air bath）として大流行をみたがEBMがないとして19世紀後半には見る影もない程、信用を失墜してしまった。この圧気浴は丁度、その再現とも言える酸素カプセル（いわゆるベッカム・カプセル）療法のことであり、この普及がスポーツ界を席卷し、北京オリンピックにおける酸素ドーピング問題にまで発展し、「HBOTは危険」との誤った印象が世間に流布されてしまった。

19世紀半ばから廃れてしまったHBOTが今日、ようやく陽の目を見たのは1960年のBoeremaによる“life without blood”の概念であり、この軌道を逆行させる訳にはゆかない。

これからの当学会に課された課題は“EBMに基づいたHBOT”の一言に尽きるのではなからうか。従来からその方針を貫いてはいたがまだまだに十分とは言えない。来年4月からは管理医制度に代わって専門医制度が発足する。学会としてのこれからの方針は、専門医、技師、学会に登録されていて安全管理の徹底している医療施設の三位一体による、EBMに立脚したHBOTの確立、ならびに適応疾患の選別や保険点数の改正等を含めた全ての戦略が組まれるものと思われる。その一端を紹介し、会員の賛同を得られれば幸甚である。